

『言海』において「牽強」「強牽」「附會」「鑿」とされる語源説について

河瀬真弥

一 本稿の目的

本稿は、明治時代を代表する国語辞書である『言海』（大槻文彦著、一八八九〜一八九一年）において、「牽強」「強牽」「附會」「鑿」とされた語源説、つまり、無理のある語源、深入りし過ぎた語源であると評された語源説にどのような特徴が見られるか、ということ考察するものである。加えて、『言海』語原説における「イカガ」から「牽強」「附會」への変更についても検討を加える。

語源を挙げることは『言海』の特徴の一つと言える。『言海』巻頭の「本書編纂ノ大意」における「五種ノ解」（辞書に不可欠なもの）は、『言海』を論じる際にしばしば言及されるものであるが、^(一)、「其三。語原」は次のようにある。^(二)

其三。語原。語原ノ説クベキモノハ、載スルヲ要ス。例ハバ、くれなゐ（紅）ハ、「呉ノ藍」ノ約ナル、ほしいままに（恣）ハ、「欲シキ儘ニ」ノ音便ナル、だんな（檀那）ハ、梵語、陀那鉢底（施主）ノ略轉ナル、びろうど（天鷲

絨）ハ、西班牙語 *Velluda* ノ轉ナルガ如キ、是等ノ起原、記ザルベカラズ。

（『言海』「本書編纂ノ大意」2頁）^(三)

語原は「載スルヲ要ス」るものであり、「くれなゐ」や「ほしいままに」「だんな」「びろうど」の語原を説明する。そして語原は「記ザルベカラズ」とする。『言海』における語原説の例として、「くれなゐ」条も見ておこう。「一」で括られている部分が語源説の部分である。

クレなゐ（名）一紅一「呉ノ藍ノ約、初メ、呉ヨリ來リ、染ムベキコト藍ノ如シ、故ニ名付ツク」（一）紅花。（二）紅花ノ汁ニテ染メ成シタル色。赤クシテ鮮カナル色。（紅花、及ビ、紅ノ條ヲ見ヨ）

（『言海』第2冊・296頁）

「クレなゐ」は「呉ノ藍ノ約」であるという語原説を挙げ、「呉」から招来され、染めることが「藍」のようであるためと

いう理由も述べられている。

『言海』の語源説に使われた資料としては、湯浅茂雄（一九九七）が『倭訓栞』、『雅言集覧』（ただし湯浅茂雄（一九九七、13頁）によるとテキストとしては『増補雅言集覧』を使用）、『雅言集覧増補并統編』、『箋注倭名類聚抄』を指摘している（湯浅茂雄（一九九七、11頁）の「表」にまとめられている）。また、湯浅茂雄（一九九七）は『言海』『大言海』の語源説に『古事記伝』が用いられていることを指摘している⁽¹⁰⁾。このように、『言海』が何を語源説に使ったか、という研究はこれまでになされている。このような研究も大槻文彦の語源に対する関心を知る上で非常に重要であるが、語源を説くために何を使ったか、ということと併せて、語源がどう説明されているかということの研究も行われるべきであろうと稿者は考える。湯浅茂雄（一九九七）においても『言海』の語源について「慎重に自説とそれ以外を区別する態度が明確である」（11頁）とあるが⁽¹¹⁾、このような語源説そのものの特徴についての知見をさらに加え、大槻文彦の語源への探究心を掘り下げていきたい⁽¹²⁾。明治を代表する辞書である『言海』における語源への態度を明らかにしていくことは、『言海』それ自体の理解を深めるのみならず、明治期の語源研究がいかにようであったか、ということを考える一助にもなるだろう。

本稿で取り上げるのは、『言海』において「牽強」「強牽」「附會」「鑿」のように、無理のある語源だと評されたものについてである。『言海』で「けんきやう」と引くと、「強ヒテ、ヒキツクルコト。無理ニ、ユジツクルコト」（第2冊・322頁）という語釈がある。『言海』で「ふーくわい」と引くと、「附ケ

アハセ、ユジツクルコト」という語釈がある（第4冊・890頁）。『言海』で「いりほが」と引くと、「心ノ入り過ギテ、實ニ遠ザカルコト」とある（第1冊・91頁）。「強牽」は『言海』の見出しに立てられていないが、「強牽」と同様であろう。いずれも語源説としては不適であることを評した語ということになる。語源部分で用いられている例を一つ、確認しておこう。

だうけ(名) 一 道化 一 齋藤道三、義子義龍ト不和ノ時、

我ニ同ゼム者ハ剃髮セヨト合ス、道化某髮ヲ半剃シ兩屬ノ意ヲ示セルヨリトイフト云、サレド牽強ナラム、おどけノ轉ナルベキカ」戯レヲ行ヒ、人ノ笑ヲ起スコト。戯ルルコト。オドケ。滑稽。『言海』第3冊・592頁⁽¹³⁾

「道化某」という人が「其髮」を半分剃ったという逸話が「道化」の語源であるという説が「牽強ナラム」と評されている。これらの評語を分析することで、大槻文彦がどのような語源説を退けようとしたのか、ということを明らかにしたい。また、「イカガ」から、「強牽」「附會」という評語への変更についても取り上げる。

二 『言海』において「牽強」「強牽」「附會」「鑿」とされる語源説で用いられる方法

結論を先に述べておくと、『言海』において「牽強」「強牽」「附會」「鑿」とされる語源説において、

- ① 逸話や伝承をもって語源を説く方法
- ② 誤解が元であると考える方法
- ③ 造字原理を検討する方法
- ④ 外来語（唐音を含む）であるか確信が無いにも関わらず外来語として処理する方法^⑤

によるものが見られた。しかし、実際にはこれらに当てはまらない方法も多い。①～④に当てはまらない語原説については、

- ⑤ ①～④に当てはまらず、何らかの語を当てる方法

と分類した。この①～④のような特筆すべき特徴を持たない⑤が相当の割合を占めている。よって、「牽強」「強牽」「附會」「鑿」とされる語源説全体の傾向として述べるとすれば、特筆すべき特徴が無い語源説が多い、としておくのが妥当であろう。

では、少し長くなるが、解釈に迷うものも少なくないため、『言海』において「牽強」「強牽」「附會」「鑿」とされる語源を一つ一つ見ていこう。例の収集にあたっては、データベース「Japanese pre-modern dictionaries 日本近代辞書・字書集」を使用し、同データベースで語源部分を「牽強」「強牽」「附會」「鑿」と検索し抽出した全例を挙げる^⑥。語源の部分に網掛けを、「牽強」「強牽」「附會」「鑿」とある部分に点線を付した。『言海』稿本などを引用する際、補入及び補入と思われる部分は【】に括り、削除により判読が困難な字は「■」を置いた。

(a) 「だうけ」条

だうけ(名) 一 道化^① 一 齋藤道三、義子義龍ト不和ノ時、我ニ同ゼム者ハ剃髮セヨト合ス、道化某髮ヲ半剃シ兩屬ノ意ヲ示セルヨリトイフト云、サレド牽強ナラム、おどけノ轉ナルベキカ^② 戯レヲ行ヒ、人ノ笑ヲ起スコト。戯ルコト。オドケ。滑稽^③。『言海』第3冊・592頁)

「齋藤道三」が「義龍ト不和」であった時、自分に従う者は髪を剃れ、と言ったところ、「道化某」が髪を半分剃って「兩屬ノ意ヲ示」したという説を紹介し、これを「サレド牽強ナラム」と評している。逸話による語源であり、①に分類される。

なお、「私版『言海』の印刷のために作られた浄書本そのものであり、現在は仙台市にある宮城県図書館の所蔵である」(山田俊雄(一九七九、712頁)、『言海』の稿本^④)では、「ヨリイフト云、説アレドイカガ」の「説」以下の部分を削除し、「サレド牽強ナラム、おどけノ轉ナルベキカ」と付け加えている。また、同じく『言海』稿本では「おどけノ轉ナラム」という記述が、元々は語源説明の冒頭にある(た三八)^⑤。慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に蔵され、「稿本の記述を活字組みしたものである」(犬飼守薫(一九九九b、「初出一九九一」)、210頁)、『言海』校正副の同条において、語源の内容に変更は見られない(第3冊・592頁)^⑥。「イカガ」からの評価の変更に ついては、本稿第四節で取り上げる。

(b) 「たんと」条

たんと(副) 〔膽斗ノ音トイフハ牽強ナラム、或云、梵語

ナリト、或云、西班牙語、Tanto(多)ノ移レルナリト
オホク。澤山ニ。ドツサリ。翻刻
『言海』第3冊・626頁

「膽斗」という字音語が語源であるという説を、「牽強ナラム」と評している。「膽斗」という語を当てて語源としており、①④に当てはまらないので⑤に分類される。他には、「梵語」説と「西班牙語」説を挙げている。

なお、『言海』稿本の語源部分では「ノ移レル」という部分が後からの補入である(た一五九)。『言海』校正刷の語源部分においては、「或云」の読点を補入するのみで内容の変更は無い(第3冊・626頁)。

(c) 「テンブラ」条

テンブラ(名) 一天**麩羅**一〔語ノ姿ト調理ノ趣トヲ考フルニ、洋語ナラムト思ハル、**西班牙語**、Templo。(寺)ノ料理ノ意ナラムトイフハ**牽強力**、或云、支那ニテ、現ニ轉不稜トイフ、是レナリト、或云、油ヲ**天麩羅**ト記セルナリト、其他、山東京傳ノ天竺浮浪人云云ノ説ナド、尚多ケレド、何レモイカガ魚介ノ肉ヲ、麩粉液ニ塗シテ、胡麻ノ油ニテ煮ゲタルモノ。魚肉ノ揚物。
『言海』第4冊・700頁

最初に「洋語ナラムト思ハル」としつつも、「**西班牙語**」(スペイン語)の「Templo.(寺)ノ料理ノ意」であるという説は

「牽強力」としている。外来語と考える語源説であり、④に分類される。なお、他には中国語の説、「山東京傳ノ天竺浮浪人云云ノ説」の説などを挙げ「何レモイカガ」としている。

なお、『言海』稿本の語源部分を見ると、「天竺浮浪人云云ノ説」という部分は元々は「記セル所」という記述である(て六一)。『言海』校正刷の同条の語源部分において、誤植の訂正は見られるものの、内容の変更は見られない(第4冊・700頁)。

(d) 「はえ」条

はえ(名) 一南風一〔梵語、婆庾(風神)二本ヅクカトモ云、**牽強ナラム**〕南ヨリ吹ク風ノ名。(中國、西國、琉球)
『言海』第4冊・803頁

「梵語」の「婆庾(風神)」に由来するという説を「牽強ナラム」と評している。外来語と考える語源説であり、④に分類される。

なお、『言海』稿本における語源部分は以下のようになっている。

〈前略〉〔梵語、婆庾【庾】(風神) 二本ヅク ■【カトモ】云、 ■■牽強ナラム〕(以下略)
『言海』稿本・は三一)

『言海』校正刷の語源部分においては、誤字の訂正(「瘦」を「庾」にする)は見られるが、内容に変更は見られない(第

③「はすーは」一条

はすーは(名)〔斜端ノ意カ、或云、蓮葉ノ義、一葉ツツ飛除キテ寄り添ハヌ意ヨリイフト、牽強ナラム〕(一)處女ナドノ性質、身持、ノ落ツカヌヲイフ語。輕佻(二)旅店ノ婢。(畿内) 〔言海〕第4冊・814頁

「蓮葉ノ義、一葉ツツ飛除キテ寄り添ハヌ意ヨリイフト」という説を「牽強ナラム」と評している。「蓮葉」という語を当てて語源を説いており、①④に属するとは考えにくいため、⑤に分類される。なお、『言海』の稿本の語源は、以下のようになっている。

〔前略〕斜端ノ意カ、或云、蓮葉ノ義、■〔引用者注〕
「ニテ」か一葉ツツ飛除キテ寄り添ハヌ意ヨリイフト、
■〔引用者注〕
「云フハ」か牽強ナラム

〔言海〕稿本・は七二

『言海』校正刷の語源部分においては、誤字の訂正は見られるものの、内容に変更は見られない(第4冊・814頁)。

④「はぶたへ」一条

はぶたへ(名)一羽二重一〔和名抄ニ、帛、波久乃岐奴、

トアリ、帛榜ノ訛ナラムト云、或ハ、呉羽穴羽ヲ重ネテ名トスト云フハ牽強ナラム〕絹布ノ精好緻密ニシテ、薄クシテ甚ダ光澤アルモノ。紋一、綾一、ナドモアリ。 〔言海〕第4冊・832頁

「呉羽穴羽ヲ重ネテ名トスト云フ」説、恐らくは「呉羽」「穴羽」と「羽」が二つ重なっているので「羽二重」とするという説を「牽強ナラム」としている(十五)。「羽二重」の「羽」という語を「呉羽穴羽」の「羽」と当てつつ語源を説いており、①④には当てはまらないと思われるため、⑤に分類される。『言海』稿本においては大きな変更があり、元々の記述は以下のようになっている。

〔前略〕(一)△ ~~帛~~ ~~榜~~ ~~ノ~~ ~~訛~~ ~~ナ~~ ~~ラ~~ ~~ム~~ ~~ト~~ ~~云~~、~~羽~~ ~~榜~~ ~~ノ~~ ~~義~~ ~~カ~~、~~帛~~ ~~榜~~ ~~ノ~~ ~~義~~ ~~カ~~、~~或~~ ~~ハ~~、~~呉~~ ~~羽~~ ~~穴~~ ~~羽~~ ~~ヲ~~ ~~重~~ ~~ネ~~ ~~テ~~ ~~名~~ ~~ト~~ ~~ス~~ ~~ト~~ ~~云~~ (二)■ ~~云~~ ~~フ~~ ~~ハ~~、~~牽~~ ~~強~~ ~~ナ~~ ~~ラ~~ ~~ム~~ (三)△ ~~和~~ ~~名~~ ~~抄~~ ~~ニ~~、~~帛~~、~~波~~ ~~久~~ ~~乃~~ ~~岐~~ ~~奴~~、~~ト~~ ~~ア~~ ~~リ~~、〔引用者注〕
「△和名抄」からここまで上側欄外の記述(以下略) 〔言海〕稿本・は二三九

『言海』校正刷において、語源の内容に変更は見られない(第4冊・832頁)。

⑤「ひさかたの」一条

ひさかたの(枕)一久方一久堅一〔日差方ノ義ト云、或

云、天先ヅ成レレバ、久堅ノ義、或云、天ハ虚ナレバ、**匏形ノ義、皆、牽強ナラム**」天ノ枕詞。轉ジテハ、雨、月、星、雲、ナド、スベテ、天上ノ物ニモ用キル。又轉ジテハ、日ノ光、月ノ都、ナドヲ略シテ、光、都、ニモ用キ、光ヨリ轉ジテハ、鏡ナドニモ用キル。

〔『言海』第4冊・855頁）

「皆、牽強ナラム」と評しているが、同様に「皆」とする(2)「ミソ」条、(3)「もがさ」条などが最初に挙げる語源を「牽強」や「附會」としているとは考えにくいため(その理由は各々の条のところ述べる)、(4)でも「日差方ノ義」は「牽強」とは見なされなかつた可能性がある。よつて、ここでは「久堅ノ義」「匏形ノ義」という説を「牽強」と評していると考えておく。「久堅ノ義」「匏形ノ義」も各々何らかの語を当てて語源を説いており、①〜④には当てはまらないと考えられるため、⑤に分類される。最初の語源説「日差方ノ義」も「牽強」とは評されている可能性も考えられない訳ではないが、仮にそうであるとしても、「日差方」も⑤の方法であり、ここで用いられている方法は⑤のみであることになる。なお、『言海』稿本において、語源部分は以下のようになっている。

〔前略〕「日差方ノ義ト云、**或■、云、**「天先【ヅ】成レレバ、久堅ノ義**ト云、**或云(引用者注…この部分汚れがあるか)、天ハ虚ナレバ、**匏形ノ義ト云、**皆、牽強ナラム(引用者注…ム)の横に短い縦線があるが意図してのものか不明)」〔『言海』稿本・ひ三四)

『言海』校正刷に「日差方、ノナレバ、匏」という記入があり、それを更に削除しているが、これは説点の位置についての訂正を試みたものと思われる(「日差方ノ」と活字を組んだ部分の後に説点を追加しようとしたようにも見える)。また、「天ハ虚ナレバ」の説点も補っているように見える。語源の内容自体については、変更は見られない(第4冊・855頁)。

(3)「へび」条

〔へび(名)一蛇〕「古言へみノ轉、**延身ノ約カ**。漢土ニ、俗一名、反鼻、其鼻反スレバナリ、サルヲ、和名抄ニ「俗或呼レ蛇爲ニ反鼻一其音片尾」トセルハ、**牽強ナラム**」古名、ヘミ。又、クチナハ。異名、ナガムシ。動物、身細ソクシテ長キコト繩ノ如ク、尾、次第ニ細ソシ、全身、細カキ鱗ニテ被ヒ、脚、耳、頭ハレズ、秋、蟄スル前ニ、皮ヲ蛻ク、白クシテ、薄紙ノ如ク、首尾損セズ、大小、種類、甚ダ多シ。其他、にしき、からす、うみ、やまががし、あをだいしやう、等各條ニ註ス。

〔『言海』第4冊・915頁）

「古言へみノ轉、**延身ノ約カ**」という説を紹介した後に、「和名抄ニ「俗或呼レ蛇爲ニ反鼻一其音片尾」トセル」という説を「牽強ナラム」と退けている。「反鼻」という語を当てて「へんぴ」という音を導くという語源であり、①〜④にも当てはまらないと思われるため、⑤に分類される(十七)。

『言海』稿本の語源部分を確認すると、「延身ノ約カ」は後

から付け足されたものである(へ二三)。「言海」校正刷の語源部分については、「古言へみノ轉」の後の句点が読点に変更されている。また、「和名抄ニ」のあたりに何らかの記述があり、それを削除したものがあがるが、判読できなかった(第5冊・915頁)。

(C)「マシラ」条

マシラ(名)一猿一「梵語、摩斯吒ノ轉ト云、或云、眞猿ノ轉、或云、申ヲ申ト讀メルニ起ルト、皆牽強ナリ」猿二同ジ。マシコ。マシ。『言海』第4冊・945頁

「皆」がどこまでを指すかが問題である。「言海」巻頭の「索引指南」3頁において、「アン(餡)パン(麵包)此活字ナルハ唐音ノ語、其他ノ外國語ナリ」とある通り、見出しをカタカナで書くのは基本的に外来語であるため、サンスクリット語(「梵語」)の「摩斯吒」に由来するという説を「牽強」とはしていないと考えられる。したがって、「眞猿ノ轉」という説、「申ヲ申ト讀メルニ起ル」という説を「皆牽強ナリ」と退けていると考える。「眞猿ノ轉」は何らかの語を当てる方法であり、①④には当てはまらないため⑤に、「申ヲ申ト讀メルニ起ル」という説は、誤解が元であるので②に分類される。ただし、後述の(C)「とら」条は「朝鮮語ナラムカ」としつつも、見出しは平仮名であり、反対に(C)「ミン」条は「朝鮮語」説を挙げ、片仮名とするなど、厳密に見出しの活字を指定していない可能性もある。よって、「梵語」の「摩斯吒」が元であるとすると

説も「牽強」とされている可能性がある。その場合、「梵語」の「摩斯吒」に由来するという説は④に分類される。

なお、『言海』稿本の語源部分において、「牽強」の語は「イカガ」に代わって付けられている(ま三四)。イカ『言海』校正刷において、語源の内容に変更は見られない(第5冊・945頁)。

(C)「まひらど」条

まひらど(名)一數子戸一「間平戸ノ義カト云、イカガ、舞戸ノ轉ナラム、或ハ、玄關ニ用キルモノニテ、一參ラウ戸」ノ意ト云、牽強ナラム」戸ノ製ニ、表面ニ細ソキ棧ノ横ニ密ニアルモノ。『言海』第4冊・955頁

「玄關ニ用キルモノ」であるから、「參ラウ戸」ノ意であるとする説を「牽強ナラム」と評している。これは「參ラウ戸」ノ意という語句を当てる方法であり、①④には当てはまらないと思われるため、⑤に分類される。なお他には「間平戸ノ義」という説を「イカガ」と評し、「舞戸ノ轉ナラム」という説を挙げている。

なお、『言海』稿本において、語源の内容に変更は無い(ま七三)。「言海」校正刷においても語源の内容に変更は見られない(第5冊・955頁)。

(K)「へちま」条

へちま(名)一絲瓜一「蠻語ナリト云、詳ナラズ、或云、絲瓜

ヲ約メテ、とうりトモイフ、とハ伊呂波歌ニテ、ヘトチ
トノ間ナレバイフト、強牽ナラム」瓜ノ類、春ノ半ニ、
苗ヲ生ジ、樹竹ニ延ヒテ、蔓ヲ長ズ、葉ノ大サ、はなあ
ふひノ如クニシテ、尖リ多ク、細毛刺アリ、莖ニ稜アリ、
夏秋ノ交、五瓣ノ黄花ヲ開ク、胡瓜ノ花ニ似テ、薬モ黄
ナリ、實、圓クシテ甚ダ長ク、若キ時ハヤハラカク、漬
ケテ食フ、皮肉ヲ去リテ、筋ヲ存スレバ、狀、海綿ノ如
シ、故ニ、絲瓜ノ名モアリ、垢ヲ洗ヒ去ル用トス。イト
ウリ。トウリ。莖ヲ切りテ、液ヲ滴ラシ取ルヲ、へちま
のみづトイフ、清白ナリ、種種ノ用ヲナス、美人水ノ名
アリ。絲瓜水
(『言海』第4冊・913〜914頁)

「絲瓜」に由来する「とうり」という名があることを紹介し、
「ト」が「伊呂波歌」で「ヘトちトノ間」であることによると
いう説を「強牽ナラム」と退けている。「ヘチマ」の「ヘ」と
「チ」をいろは歌の「ヘ」と「チ」とし、それに「間」を加え
ている。何らかの語を当てている例と見なし、かつ①〜④には
当てはまらないため⑤に分類される。

なお、『言海』の稿本の語源部分を見ると「イフト、強牽ナ
ラム」の部分が元々は「イフト、イフハ強牽ナラム」であった
ことが分かる(一六一)。「言海」校正刷の語源部分において内
容に変更は見られない(第5冊・913頁)。

(1) 「くわんぜーより」条

くわんぜーより(名)〔式三番ノ烏帽子ノ懸緒ヲ、觀世

流ニテハ、紙搓ヲ合ハセテ用ルルヨリシテイフト云ハ附
會ナルベシ〕かんぜんよりニ同ジ。紙縷
(『言海』第2冊・305頁)

かんぜんより(名)〔紙裂縫ノ音便〕(二)カウヨリ。コ
ヨリ。カンジンヨリ。(二)かうよりヲ、更ニ二線合セ
テ縫リタルモノ。
(『言海』第2冊・222頁)

「觀世流」に由来するという説を「附會」としている。「觀
世流」で、どのようにしているかという逸話をもって語源とし
ており、①に分類される。

なお、『言海』稿本の「くわんぜーより」条の語源部分を確認
すると、「用ルルヨリシテイフ」の「シテ」が補入である(く
一〇九)。「言海」校正刷において、「くわんぜーより」条に変更
は見られない(第2冊・305頁)。

(3) 「じがーばち」条

じがーばち(名)〔じがハ、古名すがるノ轉ニテ、共ニ、鳴
ク聲ニテ呼ベルナラム、似我ノ字ノ音ナリナドトモイフ
ハ、附會ナルベシ〕古名、スガル。サソリ。又、コシボ
ソ。蜂ノ一種、長サ八分許、幅一分許、腰甚ダ細ソク、
全身深黒ナリ。夏、人家ニ入り、葦實、又ハ、筆管ノ中
ナドニ巢ヲ作ル、其子ノ卵、粟粒ノ如シ、螟蛉ノ子、又
ハ蜘蛛ナド取り來リテ、中ニ入レ、其子ニ粘ス、糧トス
ルナリ、更ニ泥ニテ隔テヲナスコト、數重ナリ、其子糧

ヲ食ヒ、數日ニシテ羽化ス、其聲じがじがト聞ユ、遂ニ飛去ル。(支那ニテハ、螟蛉有レ子蜾蠃負レ之トテ此蜂、螟蛉ノ子ヲ養ヒ、似レ我似レ我トテ化セシムトテ、養子ノ譬トス) 蜾蠃 蠟蟻 土蜂 細腰 又、一種、長サ一寸許、青黒クシテ、梁、柱、等ノ蛀孔ニ巢ヲツクルアリ、あをばちトイフ。青蜂 又、三分許、やまばちニ似テ小く、柱、或ハ、器物ノ蛀孔ニ巢ヲツクルモアリ。

『言海』第3冊・434頁

「似我ノ字音」という説を「附會ナルベシ」として退けている。別の語を当てて語源としており、①④にも当てはまらないため⑤に分類される。なお、他には「じがハ、すがるノ轉」という語源が挙がっており、その理由は「共ニ、鳴ク聲ニテ呼ベルナラム」としている。

なお、『言海』の稿本において、語源部分は以下のようになっている。

〈前略〉「じがハ、古名すがるノ轉ニテ、共ニ、鳴ク聲ニテ【呼ベル】~~ナラム~~【ナラム、似我】~~ナラム~~【ノ】字【ノ】音ナリ■【ナドトモ】イフハ、附會ナ~~ナラム~~【ルベシ】〈以下略〉

『言海』稿本・七一五〇し一六

また、「似我蜂」という漢字表記が『言海』稿本において削除されていることは、「似我ノ字ノ音」を「附會ナルベシ」としていることと関係するか。『言海』校正刷において、語源説に変更は見られない(第3冊・434頁)^(十九)。

(E) 「とーかく」条

とーかく(副)「左右一取捨一兎角」(第一類ノ天爾波ノトト副詞ノ斯トヲ連ネタル語、兎角龜毛ノ説ハ附會甚シ)

(一) カレコレ。アチコチ。ナニヤカヤ。トカウ。「申スベキニアラズ」―シテ出立チ給フ。此二語ノ間ニ、他語ヲ挿ミテ用キルコト多シ。「とニかくニ」とテモかくテモ」とニモかくニモ」とヤかくヤ」とサマかうサマ」ナド、其意推シテ知ルベシ。(二) ヤヤモスレバ。トモスレバ。「一争ヒノ端トナル」

『言海』第4冊・708頁^(二十)

「兎角龜毛ノ説」を「附會」としている。「兎角龜毛」という語を当てて語源を説明しており、①④にも当てはまらないため⑤に分類される。

なお、『言海』の稿本の語源部分を見ると、「斯ク」の振り仮名を書き換えている(但し書き換える前も「カ」を振り仮名とする。と二)。「言海」校正刷において、語源説に変更は見られない(第4冊・708頁)。また、「兎角龜毛ノ説」を否定することと関係しているのか、『言海』稿本、『言海』校正刷の双方において、漢字表記が「一兎角一左右一取捨」という順であったのを「兎角」を最後に変更する指示が記入されている。

(O) 「とじ」条

{とじ(名) 一刀自一(戸主ノ約トイフ、イカガ、字、或

ハ、刀自ヲ合シテ一字ニモ作レリ、ソハ麻呂ノ磨ノ如シ、サルヲ、和名抄ニ、支那ノ古語ニ、謂ニ老母一爲レ負トアル負ノ字ノ譌トセルハ附會ナリ、刀自ハ老婦ニ限ルニアラズ」(一) 家ノ妻ナド、スベテ、婦人ノ専ラ家事ヲ主ル者ノ稱。延ベテ、とうじ。允恭紀ニ、忍坂大中姫、母ニ隨テ家ニアリ、苑中ニ遊ビ給ヘル時、鬮鷄國造、嘲リテ、壓乞、戸母戸母此日ニ觀自ト呼ベルコトアリ。萬葉集ニ、大伴坂上郎女、其留宅ノ女ニ贈レル歌ニ、吾兒乃刀自云云、又、淨御原御宇天皇之夫人、字曰ニ氷上大刀自一。靈異記訓釋ニ、家室。遊仙窟ニ、娘子既主主人母。伊勢物語ニ、家とうじ、マメニ思ハムトイフ人ニツキテ、云云、をんなあるじニ盃取ラセヨ。

主婦(二) 轉ジテ、人ニ仕ヘテ其家事ヲ掌ル婦ノ稱。「宮宮ノとじ専女ニテモ、コノ御子ヲダニ生ミタラバ」(三) 又、下藤ノ女官ノ稱。「刀自、御膳宿、臺所、各別地、云云、是一向御膳役者也」 《言海》第4冊・716頁(二)

「刀自ヲ合シテ一字ニモ作レ」ると述べ、そして、「和名抄ニ、支那ノ古語ニ、謂ニ老母一爲レ負トアル負ノ字ノ譌トセル」という説、つまり「負」という字の「譌」(なまり)が語源であると考え、そこから意味を解釈する説を「附會」としている(その字は「麻呂」を「磨」と書くようなものであるとしている)。造字原理を検討した説であり、③に分類される。なお、他には「戸主ノ約」という説を「イカガ」と表している。

『言海』の稿本の語源は以下のようになっている。

〔前略〕「戸主ノ約トイフ、イカガ、字、或ハ、刀自ヲ合シテ一字ニモ作レリ、ソハ麻呂ノ磨ノ如シ、サルヲ、和名抄ニ、支那ノ古語ニ、謂ニ老母一爲レ負トアル負ノ字ノ譌トセルハ附會ナリ、刀自ハ老婦ニ限ルニアラズ」(以下略) 《言海》稿本・と四八)

なお、「如シ、サルヲ」の部分は、あくまでも影印による所見では何らかの書き換えの結果である可能性があるが、正確なことは分からない。『言海』校正刷の語源部分について、「或ハ刀自」の「刀」に訂正を試みようとしたとおぼしき記入が見られるが、内容に変更は見られない(第4冊・716頁)。

(ハ) 「とら」条

とら(名) 一虎一「朝鮮語ナラムカ、人ヲ捕ル意ノ名トイフハ發聲ニテ、或云、支那ニテ、楚人、虎ヲ於菟トイフ、於ハ發聲ニテ、(越ノ於越ノ如シ) 其菟ヲ傳ヘテ、らノ助語ヲ添ヘテイヘルナリト云、此説モ附會ナラムカ」猛獸ノ名、亞細亞大陸ニ多シ、高サ三尺許、長六尺許、大ナルハ丈許、頭、猫ニ似テ、體ニ比ブレバ小サク、尾長シ、獅ニ次ギテ猛クシテ、他獸ヲ捕リ食フ、背ノ毛黄赤色ニシテ、遍ク太キ黒線アリテ美シ、コレヲ虎斑トイフ、數物ナドトシテ珍トス、面、喉、腹下、色白シ。

《言海》第4冊・730頁)

「楚人」が「虎ヲ於菟トイフ」ことに由来するとし、「菟」

に「助語」である。「ら」が加わったという説を「此説モ附會ナラムカ」としている。「楚人」が「虎ヲ於菟」トイフという伝承を起点とする語源説であり、①に分類される。他には「朝鮮語ナラムカ」とし、「人ヲ捕ル意ノ名」の説については、「イカガ」としている。

なお、『言海』稿本においては元々末尾に「添ヘテイヘルナリトイフモイカガ」とあったのが、「添ヘテイヘルナリト云此説モ附會ナラムカ」という評価に改められている(と九四くと九五)⁽¹¹³⁾。また、この部分は『言海』校正刷に無い(犬飼守薫(一九九九b、189頁)でもここを含む部分を欠くことが報告されている)。

(b) 「はしら」条

はしら(接尾) 一柱一〔立チ並ビオハスルヲ數フル意ノ語〕

ナラムト云、或ハ、古以ニ貴人一諭レ於レ木、故爲ニ一

柱一木一、以ニ賤人一諭レ於レ草、故謂ニ青人草一トモ云、

附會ナラム〕神、佛、貴人、ヲ敬ヒテ數フル語、幾所

幾方ナド言ハムガ如シ。二三柱ノ神ノ皇子、二柱ノ太政大臣、一柱ノ觀世音菩薩、一柱ノ

〔『言海』第4冊・813頁〕

「古以ニ貴人一諭レ於レ木、故爲ニ一柱一木一、以ニ賤人一諭レ於レ草、故謂ニ青人草一トモ云」という説、つまり、昔は「貴人」を「木」に「諭」えたため「一柱一木」とし、また「賤人」は「草」に「諭」えたため「青人草」と言う、とする説を

「附會ナラム」と評している。「古以ニ貴人一諭レ於レ木」をある種の伝承と考えると、①に分類される。

なお、『言海』の稿本を見ると、以下のようになっている。

〔前略〕〔立チ並ビ準オハスル〕ヲ數フル意ノ語ナラムト云、~~或ハ、~~古以ニ貴人一諭レ於レ木、故爲ニ一柱一木一〔引用者注…「木」の振り仮名を削除する、以ニ賤人一諭レ於レ草、故謂ニ青人草一ト■〔引用者注…「ア」を削除か〕【モ云】~~ナ~~附會ナラム〕〔以下略〕〔『言海』稿本・は六八〕

・『言海』校正刷において語源説に変更は見られない(第4冊813頁)。

(c) 「はも」条

はも(名) 一鱧一〔古名、はむノ轉、海鰻ノ唐音ト云フハ

附會ナリ〕古名、ハム。魚ノ名、畿内中國ノ海ニ多シ、

形、うなぎニ似テ大ク、灰色ニシテ、腹、白ク、背、長ク尖リテ、齒多シ、背鱗アリテ尾ニ連ル、大ナルハ、長サ三四尺、肉ニ小骨多シ、味、淡甘ニシテ、蒲鋒ニシテ佳ナリトシ、或ハ、生、炙、共ニ食フ。海鰻

〔『言海』第4冊・840頁〕

「海鰻ノ唐音」であるという説を「附會」としている。「唐音」は『言海』では外来語扱いである。『言海』「索引指南」3

頁の「(十二)」に片仮名で示したものは、「唐音ノ語、其他ノ外國語ナリ」とある。また、『言海』巻末の「言海採収語：類別表」には、「唐音」は「外來語」となっている。よって、外來語として処理されたものを「附會」としているかと判断でき、④に分類される。

なお、『言海』稿本の語源部分を見ると、この「附會」という評価は「イカガ」という評価であった。また、「はむノ轉」とある下に削除された字があるが、判読できなかった(は一六六)〔一四四〕。『言海』校正刷において、語源説に変更は見られない(第4冊・840頁)〔一四五〕。

(s) 「ハシ」条

ミソ(名) 一味醬一味噌一〔朝鮮語ニ、醬ヲ蜜祖トイフ、和名抄ニ、高麗醬ノ稱アリ、證トスベシ、同書ニ、末醬ヲ未醬ト誤レリトノ説、或ハ、唐僧、鑑眞、嘗メテ未會有ト稱シタルニ起ルナドイフ、皆、附會ナリ〕(一)
味噌豆ヲ煮テ、搗キタダラカシ、麴ト鹽トニ和シテ、桶ニ藏シテ、日ヲ歴テ醸シ成スモノ、搗リテ汁トシ、又物ニ味ヲ添フルニ用ケル、古ク、又、香トモイヘリ、臭高ケレバナリ。「香ノ物」ナドイフ、コレナリ。製ニヨリテ、赤一、白一、玉一、等アリ、各條ニ註ス。(二)
+鄙語ニ、面目ヲ失フコト。「ヲアゲル」一ツケルナドイフ。(味噌ノ味噌臭キハ下品ナリトイフニ起レリト云)
〔『言海』第4冊・970頁〕〔一五六〕

「朝鮮語ニ、醬ヲ蜜祖トイフ」という語源は、「和名抄ニ、高麗醬ノ稱アリ」という論拠を挙げて、「證トスベシ」と、しているため、この説は「附會」とは見なされなかったと考えられる。よって、「同書(引用者注：「和名抄ニ」)末醬ヲ未醬ト誤レリトノ説」と「鑑眞」が「未會有ト稱シタル」という説が「皆、附會ナリ」と評されたと思われる。「末醬ヲ未醬ト誤レリトノ説」は誤解が元である語源であるため②に、「鑑眞」の逸話に基づく語源は①に分類される。

なお、「唐僧、鑑眞、嘗メテ」とある部分が『言海』の稿本においては、「唐僧、鑑眞、歸化シテ嘗メテ」となっている。また、「醬ヲ蜜祖トイフ」とある下に何らかの字があり、削除されているが、判読できなかった(み二五)。『言海』校正刷の語源部分において、誤字の訂正は見られるものの内容の変更は見られない(第5冊・970頁)。

(c) 「もがさ」条

もがさ(名) 一痘瘡一〔又、いもがさとモ見ユ、齋瘡ノ約ニテ、禁忌多ケレバイフト云、今モ痘痕ノ語アリ、或ハ、和名抄ニ、炮、面瘡也、ヲ引ケルハ誤レド、尚、面瘡ト訓ジタル意カ、痘、先ヅ面ニ發ス、其他、喪瘡、裳瘡ノ説アレド、皆、附會ナラム〕痘瘡ニ同ジ。續紀「延暦九年、秋冬、京畿男女、年三十以下者、悉發ニ豌豆瘡一俗云ニ裳瘡ニ」和名抄「唐韻云、炮、面瘡也、炮瘡、此間云ニ毛加佐ニ」榮花物語「今年いもがさトイフモノ、起リヌベシトテ」
〔『言海』第4冊・1010頁〕〔一七七〕

「其他、喪瘡、裳瘡ノ説」という説を「皆、附會ナラム」として思い思われる。「喪」や「裳」などの語を当てて語源を説いており、①④にも当てはまらないため⑤に分類される。

なお、「齋瘡ノ約ニテ、禁忌多ケレバイフト云」という説は「今モ痘痕ノ語アリ」と、その合理性を認めている。また、「或ハ、和名抄ニ、皰、面瘡也、ヲ引ケル」ことも「誤レド」としつつも、「面瘡ト訓ジタル意カ、痘、先ゾ面ニ發ス」と、顔にまづ発症することを理由に、その合理性を認めていると考えられる。よって、「齋瘡ノ約」と「面瘡」の説については「附會」と評された例には含めなかった。

なお、『言海』稿本において、語源説明の「痘痕」を「瘡」の字から「痕」に修正している。また、「齋瘡」が『言海』稿本では「齋瘡」となっている（も四）。『言海』校正刷の語源部分においても同様の誤字の訂正が見られる。また「ノ語アリ、或ハ」の「語」にも何らかの訂正を試みようとした形跡は見られるが、語源の内容に変更は見られない（第5冊・101頁）。

(E) 「もり」条

もり(名) 一森シノ二シノ茂モキ意ト云、或ハ、叢ムラノ轉カ、又ハ、盛セキノ義カ、或ハ、木キ林リンノ音ノ約、森ハ其二合字ナリトイフハ、附會ナリ(一) 木立ノ、殊ニ叢立チタル處。林ノ繁キモノ。叢樹ムラツキ(二) 特ニ、神社ニアル地ノ木立ノ處。「生田ノ杜」ナマツノノ「紵ノ杜」ヌメノ 叢ムラ樹ツキ

『言海』第4冊・1022頁(二二八)

「或ハ、木キ林リンノ音ノ約、森ハ其二合字ナリトイフ」とある。「木」と「林」に分解し、語源を考える説を「附會」としていう。造字原理に遡る説であり、③に分類される。他には「茂モキ意ト云」「叢ムラノ轉」「盛セキノ義」という説を挙げている。なお、『言海』稿本における語源は以下のようになっている。

〔前略〕シノ茂モキ意ト云、或ハ、叢ムラノ轉カ、~~叢~~木キ又ハ、盛セキノ義「カ」、或シ非ヒ「ハ」、木キ林リンノ音ノ約、森ハ其二合字「ナリ」トシノ木キ林リン「イフハ」、附會ナリ(以下略)

『言海』稿本・も五三

『言海』校正刷において、変更は見られない(第5冊・1022頁)。

(F) 「おほまか」条

おほまか(名) 一細コホニ對シテ、大オホまかナドイヘル俗言カ、大摩訶ナラムトノ説ハ、鑿シカナラム(おほやうニ同ジ)。

『言海』第1冊・155頁

おほオホまマカカ(名) 一大オホ様サマ(二)オホカタ。大抵。(三)心、動止コホノ寛クワンニシテ、卑ヒシキ風ナキコト。オホマカ。優ユウ雅マヒ

『言海』第1冊・155頁

「大摩訶ナラム」との説が「鑿シカナラム」と退けられている。「鑿」として退けられた「大摩訶」について、『言海』の「マカ」条は「梵語大、ノ義」(第4冊・938頁)とすることから、

「おほーまか」の語源を外來語（「梵語」）と考える説と見なした。よって④に分類される。

なお、『言海』稿本の語源部分においては、「鑿ナラム」は元々、「鑿ナルベシ」であった（お五九、この他、「鑿」の「リ」を書き直している）。『言海』校正刷の語源部分に関して、誤字の訂正を除いて内容の変更は見られない（第1冊・155頁）。

(M) 「おろかー」条

おろかーに（副）一愚一〔梵語、阿羅伽ノ轉トイフハ、鑿ナラム、足ラハヌ意ノおろおろト通ズル語ナルベシ〕智乏シク。理解ノ心缺ケテ。（『言海』第1冊・162頁）

「梵語」で「阿羅伽ノ轉」であるという説を「鑿ナラム」と退けている。「梵語」説を退けており、④に分類される。

なお、『言海』稿本において変更は見られない（お八三）。『言海』校正刷においても内容の変更は見られない（第1冊・163頁〔頁数の印字なし。朱で「六十三」とある〕）。

三 「牽強」「強牽」「附會」「鑿」と評されるのは方法自体の不適切さが原因か

「牽強」や「強牽」「附會」と評された語源説で用いられている方法を改めて確認しよう（二十九）。

① 逸話や伝承をもって語源を説く方法

- ② 誤解が元であると考える方法 …… (a) (b) (c) (d) (e)
- ③ 造字原理を検討する方法 …… (o) (p) (q) (r) (s) (t) (u) (v) (w) (x) (y) (z)
- ④ 外來語（唐音を含む）であるか確信が無いにも関わらず外來語として処理する方法 …… (c) (d) (e) (f) (g) (h) (i) (j) (k) (l) (m) (n) (o) (p) (q) (r) (s) (t) (u) (v) (w) (x) (y) (z)
- ⑤ ①～④に当てはまらず、何らかの語を当てる方法 …… (a) (b) (c) (d) (e) (f) (g) (h) (i) (j) (k) (l) (m) (n) (o) (p) (q) (r) (s) (t) (u) (v) (w) (x) (y) (z)

これらの原理（特に①～④）に基づく語源は「牽強」や「附會」と評される可能性があるということになる。しかし「牽強」や「附會」などとされた語源説と同じ原理に基づいた語源説でありながら、「牽強」や「附會」とは評されない『言海』の語原説もある。

① 逸話や伝承をもって語源を説く方法」に類する例ではあるが、「牽強」や「附會」とは評されない例には「げちげち」条、「せーいん」条、「そがーぎく」条がある。

げちげち（名）〔假名遣、サダカナラズ、或云、梶原景時、常ニ右幕下ノ下知ナリト稱ヘテ、威ヲ振ヒシカバ、人、げちげちト渾名シテ忌メリ、蟲ノ名此ニ起ルト、或云、景時ノ名ヲ、音ニテ、げじげじトイヘルナリト、サラバ、げじノ假名ナラムカ〕蟲ノ名、夏、床下ナドノ濕地ニ居リ、夜出デテ、小蟲ヲ捕リ食フ、長サ一寸許、むかでニ似テ、狭クシテ平ナラズ、足多クシテ細長ク、走ルコト甚ダ速ナリ、淡褐色、或ハ、黒ミアリ、薄黒キ斑アルモアリ。蝮

（『言海』第2冊・316頁）

せつーいん(名)―雪隠一〔福州ノ雪峯義存禪師、常ニ隱所ヲ掃除シテ、大悟ヲ得タリ、因テ名トスト云、或云、雪竇禪師、靈隱寺ノ司廁ノ職得タリシヨリイフト〕廁ノ異名。セツチン。〔言海〕第3冊・553頁)

〔そがぎく(名)―黃菊一〔仁明帝、黃菊ヲ好ミ給ヒケレバ、其年號ニ因テ承和菊ト呼ブナリト云〕黃菊ノ稱。我サラバ、標結ヒ立テム、岡ノ邊ニ、人モスサメヌ、そがぎくノ花〕そが菊ノ色ナル河、一タビ澄ミテ〕〔支那ノ黄河ヲイフ〕〔言海〕第3冊・568頁)

「げぢーげぢ」条では、一つ目の「梶原景時」が「常ニ右幕下ノ下知」であつたからという語源が①の方法にあてはまるが、「牽強」や「附會」などとはされていない。『言海』稿本を見ると、上側欄外に「濃州ニ梶原トイフ」というメモがある(け二七)。「濃州」ではこの虫を「梶原」と呼ぶということであろう。この書き入れからは、大槻文彦がこの説を補強しようとしていたことすら窺える。②。「せつーいん」条では、「雪峯義存禪師」が「隱所ヲ掃除」により「大悟」したからという説と「雪竇禪師」が「靈隱寺ノ司廁ノ職」であつたからという説を挙げているが、「牽強」や「附會」のように退けられてはいない。③。「そがぎく」条では、「仁明帝」の逸話を引き、「其年號ニ因テ承和菊」という説を挙げているが、「牽強」や「附會」とはしていない。

また、「(d)」「と」「び」条に関して、「おと」条は以下のようにつづいている。

おと(名)―於菟一〔楚人謂レ虎爲ニ於菟一〕(一)虎、ノ異名。(二)轉ジテ、猫、ノ異名。〔言海〕第1冊・145頁)

「とら」条では、「或云、支那ニテ、楚人、虎ヲ於菟トイフ、於ハ發聲ニテ、(越ノ於越ノ如シ)其菟ヲ傳ヘテ、らノ助語ヲ添ヘテイヘルナリト云」という、「楚人」が「虎ヲ於菟トイフ」ということを起点とする語源説が「附會ナラムカ」とされている。しかし「おと」条では「楚人謂レ虎爲ニ於菟一」とあるように、「楚人」が「虎」を「於菟」と呼んでいたという伝承による語源説は退けられていない。このことから、「楚人」についての伝承による方法それ自体を「附會」と考えていた訳では無かつたと思われる。

② 誤解が元であると考える方法」に類する例ではあるが、「牽強」や「附會」とは評されない例には、「あひーおい」条、「へうーたん」条がある。

あひーおい(名)―相老一〔相生ヲ誤解シテ轉ゼルナリ〕

諸共ニ、久シク存命フルコト(夫婦ナド)偕老。〔言海〕第1冊・25頁)

へうーたん(名)―瓢箪一〔一箪食一瓢飲ヲ、朗詠集ニ、

瓢箪屢空、ト熟語ニ用ヰタルヨリ誤用ス〕夕顔ノ一種、

其實ノ形圓ク長ク、中括レテ兩端脹ラカニナルモノ、肉、苦クシテ食フベカラズ、乾シテ中ヲ空ニシテ酒ヲ盛ル器トス。フクベ。ヒサゴ。ヘウ。壺盧。百成一トイフハ、

長、四五寸ナルモノ。十成トイフハ、甚ダ小クシテ、二三寸ナルモノ。瀬廬 『言海』第4冊・912頁)

「あひおひ」条では「相生」の「誤解」であるという語源説を挙げる(三十四)。「へうたん」条では「二簞食一瓢飲」を「瓢簞屢空」としたという「誤用」を語源としている(三十五)。しかし、いずれも「牽強」や「附會」とはされていない。

③ 造字原理を検討する方法」に類する例ではあるが、「牽強」や「附會」とは評されない例には「ひは」条、「みごろ」条がある。

ひは(名)一鵝一金雀一(弱鳥ノ合字アレバ、ひはひはト弱キ意ナラム)小鳥ノ名、雀ヨリ小ク、全身黄ニシテ青ミアリ、頭、背、頸、翅、黒色ヲ交フ、尾、脚、黒ク、腹、黄白ニシテ、觜、小ク灰色ナリ、粟稗ヲ食トス、秋來ル、能ク轉リテ、清滑ナリ、ひゆんちゆんちゆんト聞ユ、他名ニ對シテ、眞トイフ。一名、唐一。金翅又、紅一、蓼一、河原一、等アリ、各條ニ註ス。

『言海』第4冊・86頁(三十三)

みごろ(名)一裯一(身衣ノ略カ、字モ其合字ナリ、或云、身軀ノ轉)衣服ノ袖、襟、袷、ナドヲ除キテ、體ノ表背ノ全部ヲ被フ處ノ布帛ノ稱、表、背、各、二布ヅツナリ。『言海』第4冊・96頁(三十七)

「ひは」条では「弱鳥ノ合字」という造字原理から語源を「ひ

ひははト弱キ意ナラム」と類推している(三十三)。また、「みごろ」条でも、「身衣ノ略」という語源を挙げて、「字モ其合字ナリ」と造字原理を根拠としている。いずれも造字原理に遡っているが、「牽強」や「附會」などとはされていない(三十五)。そもそも、造字を考えることは、『大言海』の「本書編纂に当りて」16頁において、

離合迷字

支那にて離合迷字といふことあり。一字の偏と旁とを離し、或は二字合はせて一字として、迷字(謎)を作るなり。我が邦にも、語原ならで、字源を考ふるにつきて、この事を念頭に置かずはあるべからず。

とある。『言海』当初のことではなく、「語原ならで字源」とはあるものの、言葉の「源」を考える上で、「この事を念頭に置かずはあるべからず」とするように、注意が払われていたことが分かる(三七)。

④ 外来語(唐音を含む)であるか確信が無いにも関わらず外来語として処理する方法」に類する例ではあるが、「牽強」や「附會」とは評されない例には、「カバン」条、「コエンドロ」条がある。

カバン(名)一鞆一(洋語ナラム)革、布ナドニテ包ミ作レル匣、近年、西洋ヨリ入り、専ラ、旅行ノ用トス。

『言海』第2冊・207頁)

コエンドロ (名) 〔蘭語、コリアンデル、ノ轉ト云、原字詳ナラズ〕 古名、コニシ。コシ。草ノ名、舶來ノ種ナリ、秋ノ半ニ、種ヲ下ス、葉ハ、互生シ、初メ、圓ク小クシテ、鋸齒アリ、成長シテ、三葉トナリ、漸ク、花岐多クナル、春、一二尺ノ莖ヲ出ス、梢ノ葉ハ細クシテ絲ノ如シ、夏ノ初メ、莖ノ上ニ、細小ノ花、簇リ開キテ、傘ノ、狀ヲナス、五瓣ニシテ、淺紫色ナリ、實ハ正圓ニシテ、一分許、臭ミアリ、藥トス、根、軟カニシテ白シ、冬、春、採リテ食フベシ、香美ナリ。胡荽

〔『言海』第2冊・334頁〕

「カバン」条では、『言海』稿本での語源を確認すると、元々は「洋語ナラム、詳ナラズ」であつたが、「詳ナラズ」を削除しており、曖昧さを取り除いて単に「洋語ナラム」となつた(か一三六) 〔四十二〕。「洋語」とだけあるので、何語であるか、スペルは何かということが分からず、外来語と見なしてよいかという懸念があるが、「牽強」や「附會」などもされていない。この点、「詳ナラズ」としておいた方が無難であつたかも知れない。「コエンドロ」条では、「蘭語、コリアンデル、ノ轉ト云」とするが、スペルは分からないという 〔四十三〕。スペルが分からないので、外来語と見なしてよいかどうかに不安が残るが、「牽強」や「附會」とはされなかつた。

また、「⑤ ①く④に当てはまらず、何らかの語を当てる方法」に關して、「いたどり」条、「おほーかみ」条と、「⑥」「はすーは」条、「⑨」「ひさーかたーの」条(いずれも⑤に分類)を照らし合わせてみよう。

いたどり (名) 一虎杖 一〔根ヲ藥用トシ、血痛墜撲ヲ治スレバ、疼取ノ義カト云〕 古名、多遲。宿根草、春生ズ、新芽ハ、形ウビノ如ク、煮テ食フベシ、莖ノ高サ、丈餘ニ至リ、圍ミ二三寸アリ、中空シクシテ節アルコト、竹ノ如ク、杖トスベシ、葉ハ互生シ、圓ク長クシテ一尖アリ、夏、葉ノ間ニ、小花、穂ヲナシテ集リ開ク、紅ト白トノ二種アリ、實ハ三角ニテ、薄キ翅ノ如キモノアリ。サイタツマ。スカンボウ。 〔『言海』第1冊・62頁〕

おほーかみ (名) 一猓 一〔大神ノ義、恐レテ尊稱スルナリ〕 獸ノ名、深山ニ棲ム、犬ニ似テ、瘦セテ大ク、目三角ニシテ、夜、光ル、喙、長ク、口、大ク、耳、小ク、頬ニ、白ク小キ斑アリ、脚ニ、蹠アリテ、能ク水ヲ渉ル、全身、茶褐ニシテ、赤ミアリ、尾太ク灰白色ナリ、聲遠ク響ク、兇暴ニシテ他ノ獸ヲ食ヒ、人ヲモ害ス。 〔『言海』第1冊・151頁〕

「いたどり」条では「疼取」という語を当てる 〔四十三〕。「おほーかみ」条では「大神」という語を当てる 〔四十四〕。いずれも「：ノ義」としつつ、その根拠を挙げる点は(⑥)の「はすーは」条が

はすーは (名) 〔斜端ノ意カ、或云、蓮葉ノ義、一葉ツツ飛除キテ寄リ添ハヌ意ヨリイフト、牽強ナラム〕 (以下略) 〔『言海』第4冊・814頁〕

とする方法、および、(e) の「ひさーかたーの」条が

ひさーかたーの(枕)一久方一久堅一(「中略」或云、天先
ツ成レレバ、久堅ノ義、或云、天ハ虚ナレバ、貌形ノ
義、皆、牽強ナラム)(以下略)

(『言海』第4冊・855頁)

とする方法に近いが、「いたどり」条や「おほーかみ」条の語源は退けられていない。

このように、方法としては「牽強」「附會」と評されたものと同様であるにも関わらず、「牽強」や「附會」などの否定的評価がなされていない場合がある。つまり、「牽強」や「附會」と評される語源説において、特定の方法を採ること自体が批判されている訳では無いと考えられる。『言海』はある方法によっている語源説を全て否定しているのではなく、その方法による語源説をとって良いかをそれぞれ個別に検討して、「牽強」や「附會」と評していると見ておくべきである(四十五)。

そもそも、「げぢりげぢ」の語源に関しては、『言海』に触発されて編纂された『日本大辞書』(山田美妙著、一八九二〜一八九三年刊)(四十六)において、『言海』で説かれたものと同じ語源が「附會」と評されている(『言海』と同じ語源説に波線を付した)。

げぢりげぢ (第四上) 名。(一) 虫蛭(一) (或ヒハげじげじト

モ書ク。假名ツカヒガワカラヌ。所傳ニ由レバ、昔シ梶

原景時ハ、常ニ賴朝ノ幕下ニ在リ、賴朝ノ下知知トイ

ヒ立テテハ下ヲ制シ、威ヲ振ツタ所カラげぢぢト綽號
ヲシテ世ガ悪ンダソコカラ起コツタトモイフ。或ヒハ
又、「景時」ノ音ヲ其儘ニ呼ンタノガ、轉シタモノトイ
フ。或ヒハ又、梶原ノ景時ノ紋所ハ二枚矢羽故、丁度其
矢ノ羽ノ體ガ蟲ノげぢげぢニ似テ居ル所カラ、縁ヲ以テ
稱ヘタトモイフ。何レニシテモ附會ラシイ説デ信用ハ出
來ヌ。但シ、コレヲ打チ破ルダケノ説モ無イ。暫クコレ
ニ從ツテげぢノ假名ニスル。(以下略)

(『日本大辞書』662頁)(四十七)

大槻文彦がある条で「牽強」「附會」と評したのと同じ方法で、大槻文彦自身もまた「附會」な語源を説いてしまったと言えよう(四十八)。

四 補論 『言海』の語源説における「イカガ」から

「牽強」「附會」への変更について

第二節で確認した語源説の中に、稿本を確認すると「イカガ」という評価であったものが、「牽強」「附會」という評価に変更されているものがあつた。改めてここで確認しよう。『言海』刊本と、稿本を対照して掲げる。

(e) 「だうけ」条

だうけ(名)一 道化(一) 齋藤道三、義子義龍ト不和ノ時、

我ニ同ゼム者ハ剃髮セヨト令ス、道化某髮ヲ半剃シ兩屬

ノ意ヲ示セルヨリトイフト云、サレド牽強ナラム、おどけノ轉ナルベキカ」戯レヲ行ヒ、人ノ笑ヲ起スコト。戯ルルコト。オドケ。滑稽カウキ。『言海』第3冊・592頁)

だうドウけケ (名) 一 道化ドウカ 一 『~~恭~~』轉テンナラハ 『齋藤道三』

義子義龍ト不和ノ時、~~我~~ニ同ゼム者ハ剃髮セヨト令ス。

【道化某】髮ヲ半剃シ兩屬ノ意ヲ示セルヨリイフト云、

△~~訛~~レド、イカガ、【△サレド牽強ナラム、おどけノ轉ナルベキカ (引用者注・「△サレド」からここまで上側欄

外の記入)】 (以下略) 『言海』稿本・た三七)

「齋藤道三」に仕えた「道化某」という人物に由来するといふ説の評価が、「イカガ」から「サレド牽強ナラム」に改められている。

(c) 「マシラ」条

マシラ (名) 一 猿イヌ 一 『梵語、摩斯吒ノ轉ト云、或云、眞猿ノ轉、或云、申サレド申ト讀メルニ起ルト、皆牽強ナリ』 猿

二 同ジ。マシロ。マシ。 『言海』第4冊・945頁)

マシラ【八分一】(名) 一 猿イヌ 一 『梵語、摩斯吒ノ轉ト云【此

云彌猴】、或【云】、眞猿ノ轉ト云、或【云】、申サレド申ト讀メルニ起ルサレドイカガ、【~~其~~、牽強ナリ】

【ト、皆牽強ナリ】 (以下略)

『言海』稿本・ま三四四十九

「眞猿ノ轉」申サレド申ト讀メルニ起ル」という説について「イカガ」という評価から「皆牽強」という評価に改められている(『梵語、摩斯吒ノ轉ト云』という説も「牽強」や「イカガ」とされている可能性もある)。

(d) 「とら」条

とら (名) 一 虎イヌ 一 『朝鮮語ナラムカ、人ヲ捕ル意ノ名トイ

フハイカガ、或云、支那ニテ、楚人、虎ヲ於菟トイフ、

於ハ發聲ニテ、(越ノ於越ノ如シ) 其菟ヲ傳ヘテ、らノ

助語ヲ添ヘテイヘルナリト云、此説モ附會ナラムカ) 猛

獸ノ名、(以下略) 『言海』第4冊・730頁)

とら④一 虎イヌ 一 『朝鮮語ナラムカ、人ヲ捕【ル意】ノ名』

トイフハイカガ、或【云】、支那【ニテ】、楚人、虎

ヲ於菟トイフ(引用者注・「於」の振り仮名の最初の

「オ」に取り消し線あり)、於ハ發聲ニテ、(越ノ於越ノ

如シ) 其菟ヲ傳ヘテ、らノ助語ヲ添ヘテイヘイカガ

【ルナリト云】、【△此説モ附會ナラムカ】(引

用者注・「△此説モ」からここまで上側欄外の記入) (以下略)

『言海』稿本・と九四く九五)

「楚人」以下の説が「イカガ」という評価から「附會ナラムカ」という評価に改められている。

(e) 「はも」条

はも(名) 一鱧一〔古名、はむノ轉、海鰻ノ唐音ト云フハ附會ナリ〕古名、ハム。魚ノ名、(以下略)

〔言海〕第4冊・840頁)

はも(名) 一鱧一〔古名、はむノ轉、海鰻ノ唐音ト云フハ附會ナリ〕(以下略)

〔言海〕稿本・は一六六)

「海鰻ノ唐音」という説の評価が「イカガ」から「附會」に改められている。

これらの条の「牽強」や「附會」という評価は、稿本を確認すると元々は「イカガ」という評価であった。

ここから、『言海』の語源における「イカガ」という評価について考えてみたい。元々「イカガ」という評価であったものが、「牽強」や「附會」という評価に改められている。このことを鑑みるに、「イカガ」という評語は疑問を呈するのみならず、「牽強」や「附會」と同様に、却下したい語源説にも付けられる評語と考えられるのではないか。したがって、『言海』の語源を読む際、「イカガ」という評価には注意しなければならぬということになる。

他の「イカガ」の例として「こぎーこぎ」条を見てみよう。

こぎーこぎ(副)〔混雜ノ音カト云フハ、イカガ〕物事ノ細カク入り雜リタル状ニイフ語。

〔言海〕第2冊・343頁)

ここで用いられている「イカガ」も疑問を呈するにとどまらない「イカガ」であったとおぼしい。実際、この条において『言海』稿本を確認すると、「フハ、イカガ」は後からの補入であり、恐らくそれに伴う形で、見出しの活字を漢語に用いる種類のものから変更している(二三九)^{五十一}。つまり、「混雜ノ音」では無いと考え、それに合わせて漢語では無いと判断しなおしたのだろう。そして漢語で用いる種類の活字ではなく、通常の活字とした。この点からも、「イカガ」は単に疑問を呈するのみならず、却下したい語源説にも付される評であったと見ておく必要がある。

なお、『言海』の「いかーが」条には次のようにある。

いかーが(副)一如何一(一)疑ヒ、又、危ブミ思フ意ヲイフ語。何ト。ドノヤウニ。イカニ。「アラム」(一)疑ヒ問フ意ヲイフ語。「思ヘル」

〔言海〕第1冊・49頁)

『言海』の語源における「イカガ」は「(一)」の意味のうち、「危ブミ思フ意」が強く出ていると言えよう。

五 本稿のまとめ

本稿で論じたのは、以下のI〜IIIの三点である。

I 『言海』で「牽強」「強牽」「附會」「鑿」として退けられる語源説では、

① 逸話や伝承をもって語源を説く方法

② 誤解が元であると考える方法

③ 造字原理を検討する方法

④ 外来語（唐音を含む）であるか確信が無いにも関わらず外来語として処理する方法

が見られるが、それらに当てはまらない、

⑤ ①〜④に当てはまらず、何らかの語を当てる方法

に属する語原説が多い。『言海』で「牽強」「強牽」「附會」「鑿」とされる語源説の傾向を述べるならば、特筆すべき特徴が無い語源説が多い、と言える。

II 『言海』で「牽強」「強牽」「附會」「鑿」とされない語源説には、「牽強」や「附會」などと評された語源説と同じ方法によっているものがある。したがって『言海』において、ある方法によっている語源説が全て否定されるということは無く、語源説の方法の是非は、それぞれの語において判断されていると考えられる。

III 『言海』の語源説における「イカガ」は単に疑問を呈するにとどまらず、「牽強」「附會」と同様に却下したい語源説にも付される評語である可能性がある。

今後の課題としては、

「かぞ（名）一父」一「高、曾、祖、父、ト世次ヲ數フル意

カト云、家尊ノ音ト云フハ、非ナリ^{イハレ}」父。「一母」

（『言海』第2冊・191頁）

にある「非ナリ」のような、語原説における他の否定的評語について考察することが挙げられる。また、本稿では、『言海』において、どのような語源説を大槻文彦が否定したのか、ということ論じたが、『言海』において、「反対にどのような語源説を好んだのか、ということも今後明らかにしていきたいと考えている（五十一）。

【注】

（一）他の四つは、「其一。發音」^{Phonetic}、「其二。語別」^{Part of the Word}（以上『言海』「本書編纂ノ大意」1頁）、「其四。語釋」^{Definition}、「其五。出典」^{Reference}（以上『言海』「本書編纂ノ大意」2頁）である。『日本語学研究事典』の「言海」の項目（古田東朝執筆）では、「巻首の「本書編纂ノ大意」では、(1)発音、(2)語別、(3)語原、(4)語釈、(5)出典、が辞書の言語の解には必要だとし、その構成のもとに編集した（ただし、「出典」は浄書の際に削除）」（102頁）と紹介される（出典については「本書編纂ノ大意」7頁に「出典ニ至リテハ、浄書ノ際、姑ク除ケリ」とあるのもよく知られていることであり、例えば山田忠雄（一九八二、563頁）に引用されている）。『日本語学大辞典』の「言海」の項目（湯浅茂雄執筆）においても、「本書編纂ノ大意」のこの箇所について言及がある（298〜299頁）。小野春菜（二〇一八 a）も「本書編纂ノ大意」の当該部分をまとめている（34頁）。大久保初男（一九二八）もこの「五種」に言及し、「博士常にいへらく、語原を研究せずして、語釋をなすは、足らざること多し

と、故に日々語原に心を注がれたること、痛ましと申しませう」(67頁(941頁))と述べている。倉島節尚(二〇一八)も「五種」に触れている(302頁)。

(二) 犬飼守薫(一九九九d〔初出一九九九〕、318頁)でも引用されている部分である。

(三) 湯浅茂雄(一九九九)は、『大言海』も扱った論考である。湯浅茂雄(一九九九)によれば、「語源説における『古事記伝』の参照態度は『言海』でより直接的であるなど、『大言海』の参照態度と異なることも指摘できるのである」(239頁)と『言海』と『大言海』の違いを述べている。また、『大言海』の語源説が何によっているかを扱った研究には、橋守部『山彦冊子』の影響を指摘した、鈴木一彦(一九六四)がある。

(四) 湯浅茂雄(一九九七)は「これに対して項目解説にはこのような態度はみられない」(11頁)とする。

(五) 犬飼守薫(一九九九a〔初出一九八〇〕)は、『言海』の語源の役割について、「語原を特立させることによって、語義の歴史的な記述を語釈の中で展開しようとしたのである」(66頁)と述べている。『言海』の語源を端緒として、病気のはしかと、鳥のすずめの語源を考察しなおしたものについては、手塚昇(一九三九)がある。また、『大言海』の語源説を取り挙げるものについては、例えば阪倉篤義(一九七四)、吉田金彦(一九七四)が、『大言海』の語源説を検討しなおしており、犬飼守薫(一九九九d、315〜323頁)、犬飼守薫(一九九九g)が植物のいちようについて『言海』から『大言海』への語源説の変遷を辿っている。他にも犬飼守薫(一九九九f〔初出一九九〇〕)が『言海』から『大言海』の語源説の変遷を検討している。ただし、本稿ではあくまで

『言海』における語源説の方法を考察することし、『大言海』への変遷については深くは立ち入らず、説の妥当性を論じたり、新説を提唱したりすることもしない。なお、犬飼守薫(一九九九d)は、「本書編纂ノ大意」1〜2頁の「五種ノ解」に触れつつ、『言海』が語原の考察に無関心であったとは言い難い。しかし、そうかと言って必ずしも積極的であったとも考えられない」(315頁)と述べ、『大言海』における語源重視の態度を論じる。『大言海』に比して『言海』の語源が簡素であることは稿者も首肯するものである。

(六) 漢語を示す活字は斜体に置き換えた。見出し語の活字については、『言海』「索引指南」3頁の「(十二)」に詳しい。風間力三(一九八五〔初出一九八一〕)は注において、「見出し語の漢語と和語との部分は、平仮名の明朝体とアンチック体(共に平活字と思われ)とで印字し別けており」(324頁)と述べている。

(七) 見出しにある「」の符号は、「古キ語、或ハ、多ク用キテ語、又ハ、其注ノ標」『言海』「索引指南」4頁の「種種ノ標」を示すものである。今野真二(二〇一三a、65〜94頁)にこの符号についての詳しい考察がある。

(八) ここで、『言海』の漢字表記の方針を、『言海』巻頭の「索引指南」4頁の「種種ノ標」にしたがって確認しておきたい。「一」は「和ノ通用字、一」辻」二杜若」ナドナリ」である。「」(末尾にあるものは「漢ノ通用字、十字術、翹子花ナド。(注ノ中に置く)である。「一」は「和漢通用字、一」日」一」月」一」長」一」短」ナドナリ」である。「日」の字がやや見えにくい。国立国会図書館蔵本(813.1-0932g)の画像、明治期国語辞書大系の影印でも同様)。今野真二(二〇一三b、130〜164頁)に、『言海』

の「和ノ通用字」「漢ノ通用字」「和漢通用字」についての詳しい考察がある。

(九)『言海』の外來語については、倉島節尚(二〇一八)で概観されている。なお、外国語と語源の関わりについては、『日本語学大辞典』の「語源」の項目(山口佳紀執筆)には、「英語やフランス語などの単語」が「同系統の言語と比較」(409頁)できることを述べた上で、

それに対して、日本語の場合は、同系統であることが確実に証明できるような言語が発見されていないから、基本的な単語ほど、起源を考慮することが困難であるということになる。こういう場合、安易に周辺の外国語を取り上げ、それと結び付けて語源を説こうとするものがあるが、その点は十分慎重でなくてはならない。(409頁)

と、外国語として処理することの危うさを指摘している。

(十)なお、データベース「Japanese pre-modern dictionaries 日本近代辞書・字書集」で『言海』の語源部分を「牽強」と検索すると、「さすがに」条も抽出されるが、これは以下に示すとおり、語源説を評価して「牽強」としたのではない。

さすがに(副)一流石一連一有繫一(しかすかにノ約ナリト云、流石ノ字ハ、晋ノ孫楚、漱一流枕一石ヲ、漱一石枕一流ト誤レルヲ、齒ヲ磨クナリ、耳ヲ洗フナリト、さすがに善ク牽強ケタリトイフ意ニ取レリトソ)(以下略)

『言海』第2冊・402頁

(十一)小野春菜(二〇一八b)は『言海』稿本について概観しており、「稿本言海」の作成時期を明治二十一年十月以降と判断し、官版のためではなく、私版(引用者注…本稿が単に『言海』と呼ぶものはこれである)のために新たに作成されたものと考えたい(66頁)とその成立について述べている。小野春菜(二〇一七、13頁)でも同様の見解が述べられている。

(十二)『言海』稿本における「だうけ」条の語源全体は、本稿第四節に引用した。

(十三)犬飼守薫(一九九b)は、

- 1 稿本が『言海』の出版原稿であることは確実と言える。
- 2 校正刷は稿本の記述を活字組みしたものである。
- 3 校正作業時にさまざまな記述変更がなされているが量的な面からすると小さなものである。また、初校校正刷になされた記述変更は基本的にはそのまま私版本に受け継がれている。(210頁)

と述べ、「校正刷は出版原稿から私版本へと至る中間段階に位置するものであるという自明のことが確認されたと言える」(210頁)とする。また、同じく犬飼守薫(一九九b)の報告によると、「極一部を除きほとんどが私版の初校校正刷であ」り(189頁)、「本文の三〇一頁、五九一頁、五九三頁、六一九頁の四頁は再版の校正刷の次に一括して整理されている」(189頁)が、「これ以外には存在しない」(189頁)。なお、「勿論、稿本を刪訂しつつ、同時にそれを基に活字組みがなされ、校正作業が進められて行くという具合で、稿本作成と校正の二作業が併せ行われたことは言うまで

もない」(大飼守薫〔一九九九b〕、182頁)とも述べられている。
『言海』校正刷については、小野春菜(二〇一八c)でも概観されている。

(十四)「奴」の字がやや見えにくい(国立国会図書館蔵本

(813-1-0932g)の画像、明治期国語辞書大系の影印でも同様)。

(十五)「呉羽穴羽」の意味するところは分からない。

(十六)なお本条に関して、『言海』稿本で「和名抄」の記述が付加されることについては、小野春菜(二〇一八d、191〜192頁)に言及があり、「私版第四冊(つ以下)の出版に際し、「出典」を充実する方針が立てられたと推測する」(192頁)と述べている。

(十七)本条は小野春菜(二〇一八d、186頁)において、『倭名類聚抄』を引く例として数え上げられている。

(十八)『言海』稿本における「マシラ」条の語源部分全体は、本稿第四節に引用する。

(十九)校正刷の頁数は朱で「四三六」から「四三四」に変更されている。なお、小野春菜(二〇二〇)は校正刷における語釈中の「羸」字の訂正を「印字された字体／字形を認めていない例」の一つに挙げている(166頁)。

(二十)「用キルコト」の「コト」の合字が見えにくい。(国立国会図書館蔵本(813-1-0932g)の画像、明治期国語辞書大系の影印は比較的文字の形が読み取りやすいため、これらにより補う。

(二十一)なお本条は小野春菜(二〇一八d、186頁)において、『倭名類聚抄』を引く例として数えられている。

(二十二)「鵠」という字は『漢英対照いろは辞典』(高橋五郎著、一八八八年)において、

よこなまる(自) 鶻, 訛, 轉訛, なまる(言葉が) To be corrupted (as the pronunciation).
『漢英対照いろは辞典』381頁(198ロケ目)

とあるように、「よこなまる」の漢字表記として当てられており、「なまる」という意味のようである。

(二十三)『言海』稿本における「とら」の語源部分の全体は、本稿第四節に掲げた。

なお、小野春菜(二〇一八a)は「とら」を『言海』に「朝鮮語」とあるものの一例に数え上げている(49頁)。小野春菜(二〇一八a、49頁)にあるのは、『言海』巻末の「言海採取語：類別表」において、「朝鮮語」が「韓語」と変更されたことについて指摘する部分(33頁)の注である。よって、「とら」を大槻文彦が「朝鮮語」と認定していたかどうか、という議論を意図はしていないと思われる。

(二十四)『言海』稿本における「はも」条の語源部分全体は、本稿第四節に引用する。

(二十五)頁数は一部朱で記入されている。

(二十六)「^{オヤリ}」は「訛語、或ハ、^{サトヒトス}俚言、又ハ其注ノ標」(『言海』の「索引指南」4頁の「種種ノ標」)を示す符号である。今野真二(二〇一三a、94〜112頁)にこの符号についての詳しい考察がある。

また、「^{ミソ}」は小野春菜(二〇一八a)では、『言海』に「朝鮮語」とある例として数え挙げられている(49頁)。なお、注(二十三)で述べた通り、小野春菜(二〇一八a、49頁)にあるのは、「朝鮮語」から「韓語」への用語の変更についての指摘(33頁)に関する注であり、大槻文彦が「^{ミソ}」を実際に「朝鮮

語」と認定していたか、ということを議論する意図は無いものと思われる。

(二十七)「齋」の部分が少ないため、稿者の推測により引用している(国立国会図書館蔵本(813.1-0932g)の画像、明治期国語辞書大系の影印でも同様)。また、小野春菜(二〇一八d、187頁)は、本条を『倭名類聚抄』を引く例として数え上げており、「語義にも『和名抄』の書名と使用例の記載がある」(小野春菜(二〇一八d、186頁))と述べている。また、小野春菜(二〇一八d)は本条を「記述が〈引用者注…『倭名類聚抄』の元和本と異なるもの」(190頁)の例に挙げ、『言海』が『箋注倭名類聚抄』を用いていることを指摘している。

(二十八)「木」の字はやや見えにくい(国立国会図書館蔵本(813.1-0932g)の画像、明治期国語辞書大系の影印でも同様)。

(二十九)複数の語源説明がある場合があるため、二度計上されている条がある。

(三十)『言海』稿本の語源部分について他に見ておくと、「景時ノ名ヲ」という部分は推敲の後の表現である(ノ名)が補入されている。また、「ヲ」は何かを削除した後に入補されている。加えて「仮名遣」の「遣」が補入されている(け二七)。
『言海』校正刷においては、「渾名」の振り仮名を加えている点、「イヘルナリト、」の読点を追加した以外に内容の変更は見られない(第2冊・316頁)。なお、山田俊雄(一九七九)が、「刊行後の手入れとしての欄外の天の場所に施された書き込みには、(以下略)」(716頁)と、風間力三(一九八五)が「書込の中には、私版刊行後の覚書も多くあると思われる」(319頁)と述べているよ

うに、「濃州ニ梶原トイフ」という書き込みも、刊行前の記入とは限らない。ただし、『大言海』の「げじげじむし」条では、「梶原景時ノ事ニ就キテ云フハ、附會ナリ」(第2巻・164頁)とある。同じく『大言海』の「かぢはらむし」条でも

〔前略〕(梶原景時、將軍頼朝ノ寵ヲ恃ミ、讒ヲ耳ニ入レテ、何事ニモ、右幕下ノ下知ナリト云ヒテ、威ヲ張りシカバ、人、げぢげぢト渾名シテ忌メリ、蚰蜒モ忌ムベキ蟲ナレバ、其名、移レルナリト云フ説アレド、附會ナリ、げじげじ(蚰蜒)ノ條ヲ見ヨ、然レドモ、此蟲ヲかぢはらト云フコト、正徳ノ頃既ニ見ユレバ、此説モ、時代ハアリ)〔以下略〕
〔大言海〕第1巻・641頁)

とあるように、「附會」としており、大槻文彦の中で考えの変遷があったようである。

(三十一)『言海』稿本の語源は以下のようにある。

〔前略〕(福州ノ雪峯義存禪師、常ニ隠所ヲ掃除シテ、大悟ヲ得タリ)〔因テ〕名トスト〔云〕或云、雪竇禪師、靈隠寺ノ司廁ノ職タリシト云〔ヨリ〕イフト(以下略)
〔言海〕稿本・せ四三)

『言海』校正刷の語源部分においては、「得タリ、」の読点を補い、「司廁」を「司廁」に直している(第3冊・553頁)。

(三十二)『言海』稿本の語源部分には以下のような変更が見られる。

〔前略〕(仁明帝、黄菊ヲ好ミ給ヒケレバ、其年號ニ因テ承和
菊ト■【呼】ブ【ナリ】ト■【云】)〔以下略〕
『言海』稿本・そ九)

なお、『言海』校正刷においては変更は見られない(第3冊・
568頁)。

(三十三)『言海』稿本において、語源の内容に変更は見られない(お
二九)、『言海』校正刷においても、語源の内容に変更は見られな
い(第1冊・145頁)。

(三十四)『言海』稿本の語源部分は以下のようになっている。

〔前略〕〔相生ヲ誤解■■■■解シテ転ぜ■ルナリ〕(引
用者注…「リテ」「レリ」に削除線あり)〔以下略〕

『言海』稿本・あ八一)

『言海』校正刷の語源部分に変更は見られない(第1冊・25頁)。
なお、本条は大久保初男(一九二八)が「舊言海」(『言海』
と「新言海」(『大言海』)と対照させて「新面目を改めました」
(70頁〔94頁〕)と評する一例に挙げられている(当該の語は69
頁〔94頁〕にあり)。ちなみに『大言海』には

あひーおい、(名)一相老一〔次條ノ語(引用者注…「相生」
ト、發音ノ同ジク聞ユルニ因リテ、移シタルナリ、謡曲
ニ始マル、謡曲ハ、舊題ヲ、相生ト云ヒキ、(稀ニ、
相老ト記シタルモアリト云フ)徳川時代ニ至リテ、高砂
ト改題シタリ、此曲ハ、足利義滿ノ代、應永年中ニ、觀

世世阿彌ノ作ナリ)夫婦、共ニ、長命ナルコト。借老謡
曲、高砂(光悦本)播州高砂ノ松「老人夫婦來レリ、云
云、高砂、住江ノ松ニ、あひをひノ名アリ、云云、松ハ
非情ノモノダニモ、相生ノ名ハアルソカシ、云云、尉ト姥
ハ、松モロトモニ、此年マデ、あひをひノ夫婦トナルモ
ノヲ、云云」此文、相老ノ意ニ移シタリ。尚、文中ノ「四
海、波、靜ニシテ、國モ治マル時津風、枝ヲ鳴ラサヌ御
代ナレヤ、逢ヒニ相生ノ松コソ、メデタカリケレ」ノ一
節ヲ、婚姻ノ席ニテ謡フヲ例トス、夫婦借老ヲ祝スルナ
リ。
『大言海』第1巻・109頁)

とある。なお、「新言海」については、「今や余は、博士の遺志を
繼承して、新言海刊行に、歩を進ませつゝあるのであります」(大
久保初男(一九二八、70頁〔94頁〕)とあるように、大久保初男
(一九二八)時点では、『大言海』は刊行されていない。大久保
初男(一九二八)の引く「新言海」の本文と『大言海』の本文と
の間に細かな異同はある。
(三十五)『言海』稿本の語源部分では、「一簞食、一瓢飲」とある読
点を削除し、「熟」の字を一度改めて書き直している(八一)。
『言海』校正刷の語源部分では「屢空ト」を「屢空、ト」に改
めている(第5冊・912頁)。

(三十六)「全身黄ニシテ」の「黄」がやや見えにくい(国立国会図
書館蔵本(813.1-0932g)の画像、明治期国語辞書大系の影印で
も同様)。

(三十七)「二布」の振り仮名の「フ」がやや見えにくい(明治期国
語辞書大系の影印でも同様)。国立国会図書館蔵本(813.1-0932g)

の画像では、やや読み取りやすい。

(三十八)『言海』稿本の語源部分では、「ひはひは」の部分が元々はカタカナの「ヒハヒハ」であった(ひ八二)。『言海』校正刷において語源部分に変更は見られないが、「アレバ」の「ア」に何らかの訂正を試みたと思われる記入は見られる(内容は不明、第4冊・86頁)。

(三十九)『言海』稿本を見ると、「或云、身軀ノ轉」は後からの補入である(み一八)。また、『言海』校正刷において、語源部分に変更は見られない(第5冊・96頁)。

(四十)「離合迷字」については、大飼守薫(一九九九e。「初出一九八八」、362〜365頁)に詳しい。また、早稲田大学に蔵される『言海参考資料』のうち、9冊目の『言語各種』という資料に「二合字 三合字 合迷字 和製字」として「弱弱鳥」が筆がっている(42コマ目)。なお、刀自についても同コマで触れている(ただし、「負」の字ではなく、「刀」の冠に「目」という字である)。以上の二語については、大飼守薫(一九九九e、366頁)に『言語各種』の当該箇所が引用されている。『言語各種』は大飼守薫(一九九九e、377頁)が、『大言海』の基礎的な資料であることが確かめられ「た」としている資料である。

(四十一)なお、『言海』稿本の時点では、語釈が大幅に異なっており、『言海』校正刷の段階で、付箋を用いて『言海』の語釈に改訂されている。ただし、語源は『言海』稿本で訂正された以降の新たな訂正は見られない(第2冊・207頁)。以下に『言海』稿本の内容を示しておく。

カバン【後】【八分一】(引用者注:「後」と「八分一」は上

側欄外の記入)(名)〔洋語ナラム、~~非ナラ~~〕手提ノ革袋ノ名、近年、西洋ヨリ入ル。
〔『言海』稿本・か一三六〕

【後】とあるのは、配列順の入れ替えの指示である。【八分一】は印刷についての指示であって内容には関わらないと思われる。

(四十二)『言海』稿本の語源部分を見ると、「ト云」の部分が後からの補入である(こ一二)。『言海』校正刷の語源部分においては、「コリアンデルノ轉、ト云」を「コリアンデル、ノ轉ト云、」にするような指示がある。(第2冊・334頁)。

(四十三)『言海』稿本を確認すると、語源部分の全体が、後からの補入である。語源の内容に変更は見られない(い五二)。『言海』校正刷において、語源の内容に変更は見られない(第1冊・62頁)。

(四十四)『言海』の稿本の語源部分を見ると、末尾の「ルナリ」が補入であることが分かる(お四八)。『言海』校正刷の語源部分において、内容に変更は見られない(第1冊・151頁)。

(四十五)山田忠雄(一九八一)は『言海』における「ウェブスター」の影響について、「大槻博士は機械的に彼(引用者注:「ウェブスター」)を訳出して此に当てる愚を避け、十分に語を選んで適用すべき場合にのみ之を適用した計画性を余裕を備えていた(559頁)、「茲において要請せられたのが、個人の語性への確実なる認識であり(559頁)と述べている。山田忠雄(一九八一)の指摘も併せて踏まえると、『言海』の論述様式を理解する上で「個別」は重要なキーワードであると言えるかもしれない。ただし、山田忠雄(一九八一)は「一つの語で或るパターンを獲得するや、そ

れを平板に流れない範囲内で他の同類の語にも推し及ぼしたことは十分に看取される」(559頁)とも述べている。

また、『大言海』には

いただ・く・クケ・カキケ(他動) 一戴||一(中略)強ヒテ、

試ミニ、予ガ牽強説ヲ言ハバ、いハ發語、ただくハ手手上

くノ約、別く、別くるナド、共ニ他動ニテ、二活用アル

モアリ、濁音ノ顛倒スル例モアリ、(いづつしノ語原ヲ見

ヨ)サレド、我レナガラ失笑ス、尚ツラツラ考フベシ、(以下略)

『大言海』第1巻・271頁)

と自らの説を「牽強」とした箇所がある。『大言海』のこの条を引用する犬飼守薫(一九九九f)は「確かに、このような点に文彦の語原論の難点が存している。しかし、これは文彦の言わば個性が惜し気もなくあらわれた箇所であり、語原散策に身を置く文彦の心情が語られている箇所と言える」(448頁)と評している(『大言海』のこの条を引用するのは犬飼守薫(一九九九f、446〜447頁))。

(四十六)『日本語学大辞典』の「山田美妙」の項目(木村義之執筆)に「代表的辞書『日本大辞書』(1892〜1896)は、刊行間もない『言海』に対抗意識を燃やし、口述筆記に補筆するという方式で作られた速成の辞書であった」(970頁)とある。『言海』と『日本大辞書』を比較する研究としては、例えば今野真二(二〇一四)がある。

(四十七)「(第四上)」は、アクセントを示したものである(『日本大辞書』巻頭部分31頁の「符号ノ解」において、「一」は「音調」

であると示されている)。『日本語学研究事典』の「日本大辞書」の項目(前田富祺執筆)には、「独自のアクセント観に基づいて語のアクセント記し」(1022頁)たことを『日本大辞書』の「特色」(1022頁)の一つに挙げている。『日本語学大辞典』の「山田美妙」(木村義之執筆)も『日本大辞書』について、「見出し語すべてに対する東京アクセントの表示」を「見るべき見解」の一つに挙げている(970頁)。

(四十八)『日本語学研究事典』の「日本大辞書」の項目(前田富祺執筆)には、『言海』の説にして異を立てようとしたり」(1022頁)とあるが、『日本大辞書』の「げぢ・げぢ」条がそのような例に当てはまるかどうかは分からない。

(四十九)「八分二」は印刷についての指定で、内容には関わらないと思われる。

(五十)漢語の字体とする指示である左傍線を削除している。左傍線について、風間力三(一九八五)が「稿本では、アンチック体(引用者注・漢語の字体)にあたる部分は凡て語の左傍に傍線を引いてあって、その区別は明瞭である」(324頁)と述べている。小野春菜(二〇一八b)が、風間力三の言及に「このことは、和漢熟語や漢外熟語における漢語部分に対しても確認できる」(67頁)と付加している。また、『言海』校正刷において、語源部分「云フハ、」の読点を補うのみで、内容の変更は無い(第2冊・343頁)。なお、語源が何語であるかということが見出しの活字選択に影響を与えた例は、他にも見られる。犬飼守薫(一九九九b)は「アダン」という語(『言海』の当該条には「熱帯地ニ産ズル常緑草ノ名」(第1冊・18頁)などの語釈が付される)について、「あだん(阿旦)」という語は文彦にとって語種の決定に苦慮した語

であったようである」(200頁)と述べ、稿本や校正刷を確認しつつその変遷を追っている。改めて稿本や校正刷などを確認して、その変遷をたどってみよう。

あだん(名)―阿旦トキハ―熱帯地ニ産スル常緑草ノ名、葉ノ形、莖ノ如クニシテ、両邊ニ刺アリ、中心ヨリ長キ莖ヲ出しテ花ヲ開ク、淡紅又ハ黄ナリ。

草蘆薈

業時になされたと考えられる。これは、稿本に変更の記述が一切見られないことから明らかである。

アダン(名)―阿旦トキハ―熱帯地ニ産スル常緑草ノ名、葉ノ形、莖ノ如クニシテ、両邊ニ刺アリ、中心ヨリ長キ莖ヲ出しテ花ヲ開ク、淡紅又ハ黄ナリ。

草蘆薈

アダン(名)―阿旦トキハ―熱帯地ニ産スル常緑草ノ名(以下略)

草蘆薈

これについて、犬飼守薫(一九九九b)は

稿本では見出しの「あだん」の左側に傍線を引き漢語と位置づけていた。ところが、初校校正刷を見るとヒラゴマで活字組みされたもの(漢語)を二重傍線を引いて「アダン」(外来語)と書き換えて語原記述の「琉球語ナラム」を追記するという校正作業をしていたことが明らかとなる。この漢語から外来語への変更は稿本作成時ではなく、校正作

と漢語から外来語への変更を指摘している(200～201頁)。この語は犬飼守薫(一九九九c「初出一九九二」、253頁)においても、「語種の変更」の一覧に挙げられている。「言海」巻末の「言海採収録語：類別表」では、「琉球語」は「外来語」に分類されている。(五十二)『大言海』の語源については、吉田金彦(一九七四)が「その語の語源を、同音による他語でもって行なう分析解法(42頁)」を指して「右に述べた如き分析解法による語原説がきわめて多い」(42頁)としている。なお、吉田金彦(一九七四)によれば、この方法は「構語論には絶対に用心すべき方法であつて、いつも正しい語源研究とはいえないものである」(42頁)という。(この方法は、本稿の分類で言うところの⑤と重なる部分があるか)。また、犬飼守薫(一九九九f)によると、『言海』の語原説を継承しつつも、『大言海』の独自性を志向している項目(454頁)については、「やもすると思弁的になりがちな個別的な『言海』の語原説の弊を取り除くために、『大言海』では、同じ構成法からなる語を整理して、当該語をその中に位置付け、そこから導き出される法則を何らかの形で反映させようとする意向が存していたと思われるのである」(454頁)という。同じく犬飼守薫(一九九九f)は『大言海』の語原説は、比較言語学や比較方言学などの観点からなされているものが極めて少ない(424頁)といったことも、『大言海』の語原説は、音義説や通略延約説といった旧来の語原論から抜け出ている点も少なくなく、その点から言っても正当な評価が与えられて然るべきであろう(424頁)とも評して

い。。

「テキスト」

・私に点線や波線、網掛けを付す場合がある（『言海』の漢字表記の傍線や二重傍線は原文のままである）。

・変体仮名、合字は改めた。

・今日からみて不適切であるとされる表現についても、変更は加えていない。

『漢英対照いろは辞典』（高橋五郎著、一八八八年）の引用は国立国会図書館蔵（特 70-533）の本によった（国立国会図書館デジタルコレクション）（<https://dl.ndl.go.jp/>）による。当該資料リンク（<https://dl.ndl.go.jp/info/ndlj/pid/902745>）。検索には全文データベースである「Japanese pre-modern dictionaries 日本近代辞書・字書集」（<https://jpano-roiz.jp/JP/DICT/>）を用いた（最終更新日二〇二一年七月二十四日）。国立国会図書館蔵本へのリンクは、同データベースからも辿ることが可能。

『言海』（大槻文彦著、一八八九〜一八九一年）のテキストは以下の通り。

・『言海』の引用は山田俊雄（編）『私版日本辞書言海』（大修館書店、一九七九年）により、調査・検索には「Japanese pre-modern dictionaries 日本近代辞書・字書集」を用いた。このデータベースは語源部分のみを対象とした検索も可能であり、本研究でもその機能を利用している。本文は一部、同データベースから確認できる国立国会図書館蔵本（「国立国会図書館デジタルコレクション」）による。請求記号「[813.1-0932g]」、当該資料リンク

（<https://dl.ndl.go.jp/info/ndlj/pid/992954>）および、明治期国語辞書大系（飛田良文、松井栄一、境田稔信〔編〕、大空社、一九九八年）の影印を確認することがある。漢語を示す活字は斜体に置き換えた。引用の際、何冊目にあたるかも示した。

・『言海』校正刷は慶應義塾大学附属研究所斯道文庫所蔵、請求記号（ハ 09.4-77-5）。調査の上で、複写の許可を頂いたものである。記して感謝申し上げる。なお、国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」（<https://kotensaki.nijl.ac.jp/>）で公開されている（当該資料リンク（<https://kotensaki.nijl.ac.jp/biblio/100338733>））。

・『言海』稿本は山田俊雄（編）『稿本日本辞書言海』（大修館書店、一九七九年）によった。引用の際、同書の番号を記した。

『言海参考資料』は早稲田大学図書館蔵（大槻文庫）、請求記号（文庫 08 A0150）。早稲田大学の「古典籍総合データベース」（<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotensaki/index.html>）による。当該資料リンク（https://www.wul.waseda.ac.jp/kotensaki/html/bunko08/bunko08_a0150/index.html）。

『大言海』（大槻文彦著、一九三二〜一九三五年）は稿者の所有する本によった。

『日本大辞書』（山田美妙著、一八九二〜一八九三年）は明治期国語辞書大系（飛田良文、松井栄一、境田稔信〔編〕、大空社、一九九八年）によった。

【参考文献】

初出を明記したものについては、最新の版のものによっている。

大飼守薫（一九九九 a）『初出一九八〇』『官版語彙』と『日本辞書

言海』とのかわり(一) 大飼守薫『近代国語辞書編纂史の基礎的研究——『大言海』への道』風間書房、第一章の一編目。初出は『近代国語辞書の成立過程——植物に関する事項の取り扱い方——』国語学懇話会(編)『国語学論集』2、笠間書院。

大飼守薫(一九九九b)『初出一九九二』『日本辞書言海』の出版刊行——稿本『言海』から私版『言海』へ——大飼守薫『近代国語辞書編纂史の基礎的研究——『大言海』への道』風間書房、第一章四の一編目。初出は『日本辞書言海』の校正刷について——近代語研究会(編)『日本近代語研究』1、ひつじ書房。

大飼守薫(一九九九c)『初出一九九二』『日本辞書言海』の校正作業の実態 大飼守薫『近代国語辞書編纂史の基礎的研究——『大言海』への道』風間書房、第一章四の二編目。初出は『日本辞書言海』の校正刷の記述について 田島毓堂、丹羽一彌(編)『日本語論究2 古典日本語の辞書』研究叢書、和泉書院。

大飼守薫(一九九九d)『初出一九七九』『日本辞書言海』の刊行後 大飼守薫『近代国語辞書編纂史の基礎的研究——『大言海』への道』風間書房、第二章一の論文。初出は『大言海への道』久徳高文、長江芳夫、荻野恭茂、橘堂正弘(編)『椋山女学園大学短期大学部十周年記念論集』椋山女学園大学短期大学部。

大飼守薫(一九九九e)『初出一九八八』『日本辞書言海』から『大言海』へ——『日本辞書言海』の増補改訂作業の実態(一)——大飼守薫『近代国語辞書編纂史の基礎的研究——『大言海』への道』風間書房、第二章二の一編目。初出は『日本辞書言海』から『大言海』へ(一)(二)『椋山女学園大学研究論集』19(第2部)。

大飼守薫(一九九九f)『初出一九九〇』『日本辞書言海』の増補改

訂作業の実態(二)(三) 大飼守薫『近代国語辞書編纂史の基礎的研究——『大言海』への道』風間書房、第二章二の三編目。初出は『日本辞書言海』から『大言海』へ(四)(五)『椋山女学園大学研究論集』21(第2部)。

大飼守薫(一九九九g)『大槻文彦の語原考証の一成果——イチヨウウの場合——』『文化と情報』2。

大久保初男(一九二八)『大槻博士逸事』『国語と国文学』517。

小野春菜(二〇一七)『稿本言海の作成時期に関する一考察』『清泉女子大学大学院 人文科学研究科論集』22。

小野春菜(二〇一八a)『言海』小野春菜『編纂資料からみた私版『言海』の成立』(清泉女子大学博士論文) 第一部第一章。

小野春菜(二〇一八b)『稿本言海』小野春菜『編纂資料からみた私版『言海』の成立』(清泉女子大学博士論文) 第一部第二章。

小野春菜(二〇一八c)『校正刷』小野春菜『編纂資料からみた私版『言海』の成立』(清泉女子大学博士論文) 第一部第二章。

小野春菜(二〇一八d)『言海』における「出典」小野春菜『編纂資料からみた私版『言海』の成立』(清泉女子大学博士論文) 第二部第三章。

小野春菜(二〇二〇)『言海』校正刷における漢字字体／字形について 日本近代語研究会(編)『論究日本近代語』1、勉誠出版。

風間力三(一九八五)『初出一九八二』『書評・紹介』大槻文彦著山田俊雄編『稿本日本辞書言海』風間力三『国語学の基礎問題』

桜風社、Ⅲの3。初出は『大槻文彦著山田俊雄編』稿本日本辞書言海』『国語学』124。

倉島節尚(二〇一八)『言海』『大言海』の外来語 沖森卓也(編)『歴史言語学の射程』三省堂。

今野真二(二〇一三 a)「見出し項目について」今野真二『言海』と明治の日本語』港の人。

今野真二(二〇一三 b)「語釈」今野真二『言海』と明治の日本語』港の人。

今野真二(二〇一四)『言海』をライバル視した山田美妙『日本大辞書』今野真二『言海』を読む ことばの海と明治の日本語』第五章、角川選書、KADOKAWA。

阪倉篤義(一九七四)「語源探究の限界」『言語生活』278。

鈴木一彦(一九六四)「山彦冊子と大言海と」山梨大学学芸学部研究報告』14。

手塚昇(一九三九)「言海の語源論」三三『国語と国文学』16-1。

山田忠雄(一九八一)「雅語辞書から普通辞書へ」山田忠雄『近代国語辞書の歩み その模倣と創意と』上、第三部第一章、三省堂。

山田俊雄(一九七九)「稿本『言海』の刊行について」山田俊雄(編)

『稿本日本辞書言海』第三卷、大修館書店。

湯浅茂雄(一九九七)「言海』と近世辞書」『国語学』188。

湯浅茂雄(一九九九)「言海』『大言海』語源説と宣長『古事記伝』

『実践国文学』55。

吉田金彦(一九七四)「国語辞典の語源記述 —— 『大言海』を例に

私見の二、三——」『言語生活』278。

『日本語学研究事典』(飛田良文、遠藤好秀、加藤正信、佐藤武義、蜂谷清人、前田富祺(編)、明治書院、二〇〇七年)。

『日本語学大辞典』(日本語学会(編)、東京堂出版、二〇一八年)。

(かわせ しんや・本学大学院文学研究科博士後期課程)